

# 男鹿と小泊の徐福に会いに行く旅

2013.6.17 修正

神奈川徐福研究会 伊藤健二

2013年5月27日から4日間、神奈川徐福研究会は、男鹿と小泊の徐福を訪ねる旅に行った。昨年12月の神奈川でのフォーラムに、男鹿の徐福研究家である山本さんに来て頂いたが、神奈川徐福研究会でも男鹿の徐福に会いに行きたいと思い、池上先生にお骨折りいただき、この旅行が実現した。参加したのは、池上先生、田島会長、三田さん、河野さん、着物着付けの先生の石毛さんと川上さん、大場さんと私の8名だ。



男鹿半島の入り口で巨大なまはげの歓迎

早朝、羽田から秋田空港に飛び、この日から3日間、山本さんの経営する温泉宿、雄山閣のマイクロバスのお世話になることとなった。なおこの報告で使用した写真のほとんどが、大場さんの撮影によるもので、改めてお礼を申し上げます。

## 27日 男鹿半島観光

### 寒風山

最初に男鹿半島入り口の寒風山に行ったが、展望台から、広大な八郎潟の干拓田、日本海、なまはげ発祥の山である真山などの眺めがすばらしい。

その後、男鹿半島突端の入道崎の荒々しい海岸を見たのち、近くの漁村に昼食を食べに行った。山本さんの手配で、タイの刺身、タイの煮付け、さらに味噌汁の中にまで尾頭付きのタイが入っている。生まれて初めて食べるたいづくしだ。



入道崎の海岸

### 水族館

午後は、最初に男鹿水族館に行った。小鹿の観光協会長でもある山本さんの顔で、館長自らに案内していただいた。小さな市にもかかわらず、施設は立派で、何時間見ても飽きないように工夫されている。特に最近生まれたシロクマの赤ちゃんが可愛いかった。

そのあとは、男鹿半島の山の中にたたずむ神秘的な3つカルデラ湖を訪れた。男鹿半島が火山でできたことが理解できた。



男鹿水族館。奥が館長、手前が山本さん



雄山閣玄関で。左から大場、川上、石毛、山本、河野、三田、田島、池上、伊藤

### 山本さんの真澄講演

夕方宿にチェックインした後、旅館の中にある資料室で、山本さんから菅江真澄についての講義を受けた。真澄は元々は三河の医者であったが、各地を旅し、土地の民族習慣、風土、宗教等の記録を多く残している。特に男鹿には長期間滞在し、多くの文章とスケッチを残している。この中に徐福塚の記述があり、これが徐福伝説の出発点となっている。男鹿の徐福研究は、菅江真澄の研究の一環のようだ。江戸時代とはいえ、徐福に関しての信頼できる数少ない歴史資料の一つで、徐福研究者にとって貴重な存在だ。



菅江真澄について講演する山本会長

### 和太鼓

その夜は、近くの会館で行われた地元の若者による和太鼓の演奏を聞きに行った。全身の力を使い、心が震えるほどの迫力がある。しかし若者達も昼間は各々仕事を持っており、また経費もかかるので、この伝統芸能を維持するには苦勞が多いようだ。



## 28日

この日は、三百年前のお堂の中に一万三千体の仏像が安置されている「万体仏」、樹齢三百年の四本の松の根が絶妙に絡み合っている「至福の夫婦松」を見た後、真山神社に向かった。



万体仏



至福の夫婦松



男鹿半島鳥瞰図 徐福塚は修験者の古道のふもとの修験寺院跡地にある。

## 真山（しんざん）神社

付近の山一帯が、修験者の霊場。江戸時代までは神仏習合であり、平安時代は天台宗であったが、南北朝時代に真言宗に変わったが、修験の霊場として栄えた。後述する徐福塚も、この山のふもとに位置している。なお、この神社の境内になまはげ館があり、なまはげの「実演」が見られる。なまはげの起源についてはいろいろな説があるが、よくわからないようだ。



なまはげ館でのなまはげの実演



真山神社

## 徐福塚

江戸時代後期の紀行家、真澄が記録したスケッチと文の中に、真山のふもとの位置「徐福塚」が記されている。この「徐福塚」は現在は確認できない。道路工事か何かで失われてしまったのではないか、ということだ。現在の徐福塚は、平成 17 年、地元の有志により、自然石を用いて復元したものだ。我々は赤神神社の神官の案内で、この地を訪れた。

復元した場所は、真澄の図から多少ずらした場所であるが、いずれにしても修験者の寺で、今は廃寺となった「永禅院」の敷地内であり、現在は赤神神社の一角となっている。またここは霊山「真山」への登山道の入り口となっている。



復元した徐福塚

## 五社堂

赤神神社の五社堂は、ここから 999 段あるという急な石段を登った場所にある。三百年前に建てられたもので、阿弥陀如来、普賢菩薩、薬師如来等の仏像を祭ってある。明治政府の神仏分離令により、廃仏毀釈が行われ、多くの貴重な文化財が失われたが、赤神神社の、神社でありながら仏像を守っていることに感動した。神官から、普段は公開していない江戸時代前期の行脚僧、円空作の十一面観音を拝ませて頂いた。1667 年、円空 35 歳の時の作だそうだ。



五社堂

### 赤神神社

このあと、赤神神社本殿に行き、神社に伝わる絵と古文書を見せていただいた。絵は漢武帝の他に、蟠桃を差し出している西王母が描かれている。（蟠桃とは三千年に一度だけ実を結ぶ桃とされ、食すと不老長生が得られるという）いつ頃画かれたものかは不明だそうだ。



元山宮司と神社に伝わる絵及び古文書



左の絵の拡大

### 真澄研究会との懇談

宿に帰って、地元の菅江真澄（すがえますみ）研究会の方と座談会を開催して頂いた。

菅江真澄は、男鹿の徐福伝説の出発点となっている。真澄と徐福の話は「徐福フォーラム in 神奈川」27ページに山本さんが詳しく記載しているので参照してください。なお、懇談の様子は、次ページの地元の新聞報道を参照してください。



右が男鹿市菅江真澄研究会、左が神奈川徐福研究会、中央は天野会長と田島会長

### 雄山閣の温泉と料理

二泊した雄山閣の温泉がすごい。風呂場では、なまはげの面の口から数秒ごとに熱い温泉が水蒸気と共に噴き出して、飛び散っていた。温泉は湯ノ花が多量に含まれており、濃厚な湯で、いかにも効能がありそうだ。料理も海の幸を中心に素晴らしいものだった。特に熱した石を鍋に入れて加熱する、という浜料理は、めったに見られない珍しいものだった。

# 県央

男鹿支局  
☎ 0185-23-2303  
FAX 0185-23-2880

南秋田支局  
☎ 018-888-1840  
FAX 018-823-2080

本荘支局  
☎ 0184-24-3122  
FAX 0184-24-3124

## 修験の山、真山・本山の麓

### 「徐福塚」など見学

神奈川の  
研究会 男鹿市訪問、座談会

紀元前3世紀ごろ、不老長寿の靈藥を求めて中国を旅立ち、日本に渡来したとされる人物・徐福を研究している神奈川徐福研究会(田島孝子会長)の会員が男鹿市を訪れ、28日、男鹿市菅江真澄研究会(天野荘平会長)の会員と座談会を開いた。

神奈川徐福研究会は、神奈



男鹿市真澄研究会の天野会長(右)の話  
を聞く神奈川徐福研究会の会員たち

山)の麓にある。徐福を考える上で、修験がキーワードになる」と話した。

天野会長は「大仙市や三種町にも徐福伝説がある。修験との関わりを中心に、秋田県内の徐福伝説の研究を進めていけば、新たなことが分かるかもしれない」と述べた。

真澄研究会の会員と、意見交換しながら交流を深めた。男鹿温泉郷の旅館で行われた座談会で、田島会長は「神奈川では、丹沢山系の大山の修験者たちの間で徐福のことが語り継がれてきた。男鹿の徐福塚も修験の山(真山・本

このほか「徐福伝説を観光に生かすなら、門前に巨大な徐福像を建ててもいいのではないか」「中国のほか、日本と同じような徐福伝説のある韓国からも、歴史巡りのツアー客を呼び込みたい」といっ

た意見が出た。徐福一行がやって来たという伝承は、男鹿市のほか九州各地、和歌山、北海道、韓国では釜山や済州島などに残っている。真澄が見たという門前の徐福塚は今も所在が不明だが、2005年に男鹿市内の有志が真澄の記録を基に塚を復元した。(安藤伸一)

「紙本金地着色男鹿図屏風」 (秋田市教育委員会作成案内書より複写)

旧修験者道場付近の古図。17世紀に、秋田藩狩野派絵師により描かれたものとされている徐福塚は、この敷地内にあった。



本山・真山を中心とする山岳一帯は、古くから赤神権現を信仰する修験者の大道場として開けたところ。貞観2年(860年)には慈覚大師がここに寺院を建立し、赤神山日積寺永禪院と名付け、赤山明神を祭神としたのが始まりといわれています。

建保4年(1216年)には、源頼朝が寺院の形容を比叡山に模して造営し、五社堂は日吉山王上七社として造られたといわれています。

最盛期には9ヶ寺48坊があったと伝えられますが、明治の廃仏毀釈を経て、往時を物語る建物は赤神神社五社堂と長楽寺のみとなりました。

背景は秋田県指定文化財「紙本金地着色男鹿図屏風」(秋田県立博物館蔵)の模写です。原本は江戸時代の17世紀の半ばから後半にかけ、秋田藩狩野派の絵師によって描かれたといわれています。今の様子と比べてみてください。

図中の解説文の転記

本山・真山を中心とする山岳一帯は、古くから赤神権現を信仰する修験者の大道場として開けたところ。貞観2年(860年)には慈覚大師がここに寺院を建立し、赤神山日積寺永禪院と名付け、赤山明神を祭神としたのが始まりといわれています。

建保4年(1216年)には、源頼朝が寺院の形容を比叡山に模して造営し、五社堂は日吉山王上七社として造られたといわれています。

最盛期には9ヶ寺48坊があったと伝えられますが、明治の廃仏毀釈を経て、往時を物語る建物は赤神神社五社堂と長楽寺のみとなりました。

## 28日 白神山地、不老不死温泉

雄山閣の車で秋田駅まで送ってもらい、所用がある池上先生と三田さんを除く6名でレンタカーを借りた。左に美しい海岸線を見ながら、五能線に沿いに北へ向かった。途中、白神山地の十三湖で一時間弱ほど散策したが、神秘的な青い湖沼が印象的だ。この日の宿は、不老不死温泉で、宿の前面は海で、海岸に露天風呂がある。やはりどろっとし、鉄の味がする、いかにも長生きできそうな泉質だ。

## 29日

不老不死温泉から、再び海岸と五能線に沿って小泊に向かった。小泊の入り口で、地元の徐福研究家の柳澤さんと合流した。柳澤さんは、小泊村史編集室長を務め、現在も「小泊の歴史を語る会」会長として活躍されている。

なお、小泊の徐福伝説については、「徐福フォーラム in 神奈川 2012」22 ページに柳澤さんが紹介していますので、参照してください。今回も、私たちのために資料を準備して頂き、このレポートを作成する上で非常に役立った。

## 尾崎神社

最初に徐福像が祭られている尾崎神社に行き、尾崎宮司から話を聞いた。像は秘仏なので祭壇の奥深くしまっており、取り出すのに一日がかりなので、当日は実物は見られなかった。柳澤さん作成の資料によると、尾崎神社は平安時代の大同2年(807年)建立。幕政時代には祭神を飛竜権現、脇侍(きょうじ・わきじ)に徐福を祀り飛竜宮となった、明治の神仏分離令により再び尾崎神社となった。



左から、柳澤さん、田島会長、尾崎宮司

宮司の話によると、像は江戸時代のものと考えられるが、どのような経過で持ち込まれたかは不明であり、修験者の寺院であったので、修験者が持ち込んだかもしれない、とのことだった。



尾崎神社の秘仏の徐福象

## 小泊の船の櫓は、佐賀と同じく右→

通常、船の櫓は左についているが、小泊の漁船の櫓は右についている。佐賀の船もそうであり、徐福と関係があるのではないか、とも言われているが、小泊の場合は、出航するときに、神社のある権現山に尻を向けないようにするのが理由だそうだ。



### 徐福像

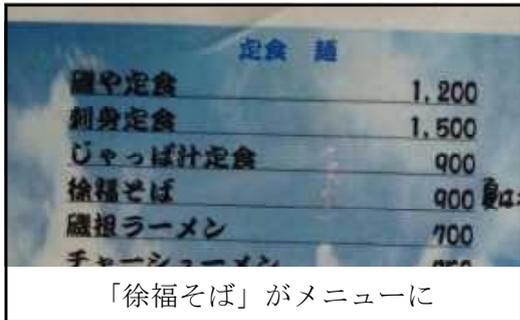
2002年建立したが、山地なので地滑りが発生し、2006年に現在地の場所に移設した。像の原画は、青森らしく、ねぶた師の竹浪比呂央氏によるものだ。

### 村おこしに活躍する徐福さん

徐福象のある徐福公園内には、「徐福の里・物産品直売所」という土産物売り場があり、「徐福まんじゅう」「権現ドリンク」や海産物が売られている。我々の昼食は、近くの食堂で、地元の海藻がたっぷり入った「徐福そば」だ。



小泊の徐福像



「徐福そば」がメニューに



太宰治と再会した彼の元子守の女性の像

### 小泊観光

小泊は、男鹿半島と同様に徐福伝説だけでなく、歴史と自然が豊かな観光地でもある。権現崎の雄大な姿。また海岸にはライオンに似た岩があり、最近作られた道路を「ライオン海道」と名付け、ライオン像、徐福や太宰治関係のレリーフなどが配置されている。

太宰治は、自分の子守だった女性を小泊に訪ねたが、その時の話が、小説『津軽』に描かれている。小泊には柳澤さんが初代館長を務めた「小説津軽の像記念館」があり、ここも見学した。

### 新青森駅から新幹線

柳澤さんと別れ、途中三内丸山遺跡に寄り、新青森駅から新幹線に乗った。東京まで三時間弱という、信じられない速さだ。実は柳澤さんから、青森市に行ったら、徐福の像の原画を描いた、ねぶた絵師の竹浪先生とお会いするように勧められたのだが、残念ながら時間がなかった。旅行計画で、小泊、青森での時間の取り方が少なかったのが反省点だ。

しかしいずれにしても、男鹿の山本さん、小泊の柳澤さんに熱心に対応していただき、徐福伝説の理解が格段に深まっただけでなく、楽しくて料理がおいしい旅行になった。

## 徐福伝説は、修験者が伝えたか？

### －男鹿と小泊の徐福伝説からわかること－

男鹿の徐福伝説の原点は、江戸時代の菅江真澄の記述による徐福塚であり、この塚があった場所は修験者の寺院の敷地内だ。また、小泊の徐福を祀る神社も修験者の寺院であった。考えてみれば、熊野三社の一つである新宮や、富士山、さらに徐福を祀る佐賀市の金立神社の下宮も以前金立権現社があった場所ということだ。権現は、仏が神の姿で現れるという、神仏習合は、熊野社等の修験道寺院に多く見られ、佐賀の徐福伝説も修験者との関係があるのではないかと興味を持たれる。他にも、池上正治先生の『徐福』の234ページに紹介されている、東京の王子神社は、東京都北区のホームページによると、中世に熊野信仰の拠点となった神社だそうだ。

小泊の柳澤さんが作成し、5月29日に頂いた資料では、いつ、だれが徐福伝説を伝えたかについて明確に記述している。「平安末期から室町時代、貴族や僧侶が『史記』を読み、熊野信仰本拠地紀州の熊野に伝わり修験者が全国に伝えた。」 また、達志保先生も、『徐福伝説考』で、各地の徐福伝説を、熊野の修験者が伝えたと考える、と書いてある。

ではなぜ修験者が徐福を伝えたのか？ 池上正治先生から聞いたところによると、修験道は道教の影響を受けているとのことだ。このことから、修験道と徐福伝説が結びついたのであろうか？ 道教と修験者と徐福伝説との関係が何なのか、非常に興味を持たれる。